街に残る江戸の終焉跡
東京 幕末歩き
～後楽園から日本橋はたまた上野などなど～

其の⑥

徳川慶喜

取材・文・構成◎三澤敏博（絡繰堂）

TOKYO BAKUMATSU WALKING

大阪より逃げ帰った雪辱の日
慶喜の胸に残ったものとは!?

今回の幕末歩きのテーマは「徳川慶喜」。いわずと知れた徳川幕府最後の将軍である。慶喜はもともと水戸藩の出身であり、かつて文京区にあった水戸藩の上屋敷にて誕生した。現在の「後楽園（**1**）」はその屋敷の庭部分にあたり、園内には水戸黄門が十八歳の時に造らせた「得仁堂（**2**）」や幕末の志士に多大な影響を与えた水戸学の学者「藤田東湖の碑（**3**）」などが残っている。

慶喜の将軍への道は十一歳の時、一橋家の養子となったことに始まる。幼くして一橋家を相続したのだ。一橋家の屋敷は現在の大手町、丸紅本社の付近一帯である。現在ここには「一橋徳川屋敷跡（**5**）」の碑が建っており、慶喜もここで生活を営んだ。

しかし、それにしても慶喜の運命というのは何とも皮肉なものである。最も過激な尊王攘夷論を唱え、志士たちを奮い立たせた水戸藩。その水戸出身の慶喜が、最終的には朝敵とされ徳川幕府を終わらせることになるのだから、胸中いかなるものであったであろうか。

そんな慶喜の微妙な立場の為か、慶喜の能力評価は大きく分かれ、やはり批判的に言われる事が多い。まぁ、それぞれの立場によって、賛否両論、出てくるのは当然であるが、しかし、ただひとつ、決定的に非難されても仕方のない大失態があった。「大阪城脱出」の件である。京の鳥羽伏見で幕府軍と薩長中心の官軍との戦いが始まった際、慶喜は部下たちを戦地に置き去りにしたまま、隠れて大阪城を脱出し、江戸まで逃げ帰ったのだ。しかもこれは慶喜が自ら戦地に出陣すると宣言した日の数時間後の事。これには批判も当然続出するだろう。しかも、この時、慶喜は自分の愛妾たちは一緒に江戸へ帰れる手配をしていたというから、どうしたものか。

実はこの日の逃げ帰った慶喜の話が詳しく残っているので史跡を追いながら見ていこう。（特に食に関する話が残っているので面白い。）

まず大阪より全速力で船を走らせ、江戸に着いた慶喜は現在の「浜離宮」である浜御殿から上陸した。この場所は「将軍お上がり場（**6**）」と呼ばれており、現在でもその姿を残し、説明板も建っている。当時、上陸した慶喜を見た幕府の人々は、この異例な事態にどれほど困惑したであろう。当の慶喜はというと御殿内の茶室で休息を取り、腹が減ったと、何か食べ物を求めた。そこで奉行の一人は自宅からビスケットを持ってきて献上したという。慶喜はビスケットの軽い食事を摂り、今後のことは勝海舟に一任して、江戸城へ向かった。

その途中でも、慶喜は護衛に鰻を買いに行かせている。慶喜曰く「長い西国生活で体力が落ちているから」とのこと。ご指定の店は日本橋の霊岸橋にあった大黒屋という店で、当時の名店中の名店である。この時、慶喜は自らこの店を指定したとか。残念ながらこの鰻屋は現存していない。

そうこうしながら、ようやく江戸城に戻った慶喜は、今度は夕食にマグロを食べたいと言い出した。ただでさえ突然の帰還で江戸中が大騒ぎであるのに、マグロの注文というのが更に周りを困惑させた。というのも、この当時マグロの古名は「シビ」といい、「死日」に繋がることから縁起が悪いと、武士はあまり食べなかったのだ。しかしながら将軍様からのお達しである。断れるはずもなく、マグロは日本橋の河岸に開設された「日本橋魚市場」の幕府用の魚納入役所から運ばれてきた。現在、日本橋のすぐ近くに「日本橋魚市場跡（**7**）」の碑が建っている。ちなみに、日本橋（**8**）の柱にある「日本橋」の文字（**9**）は慶喜が書いたものである。

このように失意の帰還を果たした慶喜は、胸が詰まるどころか大した食欲である。果たして夕食に選んだマグロには慶喜のどのような思いが込められていたのであろうか。

ひたすらに恭順姿勢つらぬいた
慶喜は徳川家の墓には入らなかった

それから慶喜は江戸城を出て上野の寛永寺に謹慎、ひたすらに恭順姿勢を示した。やがて勝海舟らの尽力により、江戸城無開城が決まると、城明け渡しの日の早朝、慶喜は寛永寺を出て水戸へと移った。水戸でも謹慎生活を続けたのだが、この頃の慶喜は別人のように寡黙になったといわれている。彰義隊や五稜郭の敗走のニュースを聞いても一切、無表情であったとか。背負っているものの大きさを感じさせられる。

慶喜はその後、静岡の駿府に移った。この頃、既に謹慎は解かれていたが、そこでも寡黙を貫き旧幕臣が訪ねて来ても会わなかったという。

それでは一体、何をしていたかというと、一切を政治から離れ、趣味に走っていた。写真や油絵、囲碁将棋に狩猟、さらには刺繍などなど非常に多岐に渡って、その好奇心を満足させていった。中でも面白いのは自転車である。慶喜はよく家の周辺を自転車で走り回っていたとか。将軍が自転車とは、まさに時代が変わったという感じであるが、もっと驚きなのは、何と車まで乗り回していたのである。しかも、現在、御徒町にある老舗の蕎麦屋「萬盛庵（**10**）」に、突っ込むという交通事故までおかしている。勿論、現在の店舗はその当時のものではないが、当時、莫大な補償金が支払われた。

そして明治三十年。慶喜は江戸に戻り、巣鴨の地に移り住んだ。現在、ＪＲ巣鴨駅の駅前に「徳川慶喜巣鴨屋敷跡地（**11**）」の碑が建てられているのがその場所だ。説明板によると、この邸宅のすぐ横に電車が開通し、騒音がうるさいので小日向に引越したとある。流石に駅前である。

それでは次に引っ越し先の小日向の地に向かってみる。ここにも説明板（**12**）が出ており、ここは慶喜が最期に住んだ地であり、慶喜の終焉の地である。

慶喜は生前、自分の葬儀は仏式ではなく神式で行い、徳川家の菩提寺には入らないと遺言していた。これは朝敵の汚名を返上してくれた明治天皇に感謝の意を示すために神式を希望したということらしい。この遺言通り慶喜は徳川の菩提寺ではなく、寛永寺の裏手に当たる谷中霊園（**13**）に葬られた。墓の形は孝明天皇の陵墓を模したもので、質素な土饅頭型の墓だ。ちなみにこの谷中霊園には幕末関連の人々も多く眠っており、三時間歩いても回り切れない程であった。

最後の将軍、慶喜。亡くなったのは大正二年で日清日露戦争後のことである。かつての将軍はそれらの事件を、一体どのような目で見ていたのであろうか。

1【後楽園】かつての水戸藩上屋敷の庭園部分である。 2【得仁堂】水戸黄門でおなじみの水戸藩二代藩主「徳川光圀」が造らせたお堂である。 3【藤田東湖先生護母致命之処の碑】白山通りにあった碑だが、道路工事のため、後楽園内に移設された。 4【藤田東湖護母致命の処】水道橋駅前。ここで藤田東湖が震災によって亡くなった。現在、標札が建つ。 5【一橋徳川家屋敷跡】現在の丸紅本社敷地内に碑が建てられている。 6【将軍お上がり場】海に繋がっている浜離宮。慶喜はここから上陸したのだ。 7【日本橋魚市場跡】日本橋のたもとに跡地の碑が建つ。 8・9【日本橋】この橋銘は慶喜によるものである。 10【萬盛庵】御徒町の駅前にある老舗の蕎麦屋。ここに慶喜が車で突っ込んだとか。

「浜御殿」でビスケットを食べてみた……

11【徳川慶喜巣鴨屋敷跡地】明治になって江戸に戻った慶喜は巣鴨に居を構えた。 12【慶喜の終焉の地】慶喜は小日向の地で亡くなった。享年77歳。 13【徳川慶喜の墓】慶喜は徳川家の墓には入らなかった。 14【高松凌雲の墓】谷中霊園にはその他、多くの幕末の人物が眠っている。 15【渋沢栄一の墓】慶喜によって見いだされた渋沢栄一の墓も谷中霊園にある。 16【上野東照宮】上野東照宮には慶喜が祀られている。 17【新門辰五郎 奉納の御水舎】町火消しの頭領、辰五郎は慶喜の信任が厚かった。これは辰五郎が東照宮に奉納した御水舎である。ちなみに大阪城から慶喜と共に脱出した愛妾は辰五郎の娘である。 18【新門辰五郎の墓】西巣鴨の盛雲寺に辰五郎が眠っている。

徳川幕府、最後の将軍、徳川慶喜
数奇の運命を背負わされた将軍の
その苦悩の日々を追う

みさわとしひろ　デザイン・イラスト制作を生業とするかたわら、見つけた銅像は三六〇度写真に収めるというコンセプトのもと、日々幕末スポットに繰り出してはコレクションを続ける。その幕末好きが高じて、ついにはオリジナルの幕末グッズを制作し販売もしている。
オリジナル幕末グッズサイト「伊呂波堂」　http://irohado.ocnk.net/